

第七章 ふるさとの言葉

第一節 方言あれこれ

方言については、三花地区だけの方言があるわけではないので、どうぜん日田方言のなかに含まれる。しかし、日田方言では広く日田市、日田郡も含まれ、そうしたらえ方のなかでは、三花は日田地域の北端にあたるので、南端の津江地区あたりとはいくらか違っているようだ。

日田方言は、大分県のなかでは特異な存在で、その特徴をひとことていえば、肥筑（肥前・肥後・筑前・筑後）方言の影響を強くうけていることだ。

つまり日田は、隣り合っている筑後や肥後と同じ方言を多くもつ地域で、「バッテン」や「どうしたバイ」という語尾の「バイ」「タイ」などがその代表格である。

日田方言は、まだじゅうぶんな研究ができてないが、これまでの研究のなかでは、肥筑方言の影響がきわめて強く、豊前（北）からの影響は少ないと見られている。

筑後や肥後からの影響はどうぜんと思えるが、日田方言には北の豊前方言と似たものも多く、豊前からの影響も決して少なくはない。そうした日田方言のなかで、豊前（下毛地区など）と隣接することから、豊前方言の影響を多くうけたことが、三花を含む日田北部地区の特徴といえる。

軽く数千語はある日田方言を、並べる紙幅もないので、特徴のある五〇語ほどをひろい、紹介することにした。あわせて、先人の暮らしのなかから生まれた、方言の「ことわざ」なども加えた。

アルキ

正月アルキや盆アルキなどといって、親類の家にお客として行くことを「アルキに行く」という。アルキは、いうまでもなく動詞の「歩く」からきている。

どこへ行くにも、歩いて行くしかなかった先祖の暮らしがしのばれることばである。

イエウチゲーサ

「隣は、イエウチゲーサ、運動会見にいちよる」などという。イエウチゲーサは、「家内じゅう・家族ぜんぶ」ということ。

豊前方言では、ヤウチゴースイ（家内合切）というそうだが、これが日田では、「イエウチゲーサ」となったようだ。

イグラヤ

家をたずねられたときに、「あすこんかどのイグラヤ」などといった。イグラヤだけで家がわかったのは、むかしは草ぶきの家が多く、イグラヤが少なかったからだろう。

イグラヤは、日田では一般に「かわらぶきの家」や、「土蔵づくりの家」をいうようだ。豊前や浮羽方面でも使われるという。

イツチエンギ

「山田原はイツチエンギすいか畑」といえば、「そこらあたり一面」ということ。「イツテンゲ」ともいい、「全

域・一円」の意味であるが、日田以外ではほとんど使われない珍しい方言のようだ。

イビシー

「イビシー、大きなへべ（蛇）がおる」。

イビシーは、日田では「気味がわるい」の意味で使うが、県下でも「いやらしい・恐ろしい・きたない」の意で使うところがある。イビシーは、古語「いぶせし」が語源で、もとの意味は、「うつつとうしい・気持ち晴れない・不快である」などの意である。

イヤリ

あり
蟻をイヤリと呼ぶ。平安時代の古書『和名抄』に赤蟻を「伊比阿里」とよむ、とあるので、これがイヤリとなったようだ。

江戸時代の日田の国学者、森春樹の『俚言鈔』には、『和名抄』の例もひき、「いひ蟻」として「飯につく蟻也」としているの、本来は残飯などにたかる、ごく小さな赤アリのことのようにだ。いづれにしても、千年以上ものむかしにさかのぼる由緒正しいことばだ。

ウスル

牛馬を使うことがなくなったので、もうまったく使われなくなったが、牛や馬の背に荷を積むことを、「牛にウスル」などといった。

これは、牛に「お負わする」のオウがウとなまり、ウスルとなったものである。

ウツスエー

食物の美味の反対で、「まずい」こと。豊前と筑前の一部で使われた「ウツサイ」のなまりである。ウツサイを使わない、筑後などでは、「ウمامネー」、「ウンモナカ」といふばかりというが、ウツスエーはそれに比べると、まずさを強調する響きがある。

ウワンタナ

がんこ者の親より、「息子はまだウワンタナ」といえば、息子の方が親に輪をかけたがんこ者ということだ。

「うわて」とか、「上位」とかの意で、上段の「上のたな棚」が語源だろうか。博多周辺部の方言に「ウワンダン」があり、同じ意味で使われている。

オーカン

子どもたちが道路で遊んでいると、「オーカンドーアスブ コター ナラン」とオゴラ（しから）れた。オーカンは「往還」で、もともとは行き帰り、つまり往來のことだが、それが道をさすようになったようだ。

しかし、小道はオーカンとは呼ばず、三花地区では中津へ向かう街道が、代表的なオーカンだった。天気がつづくど、バスが土ぼこりをもうもうとたてて走った、むかしの往還が懐かしい。

オロイー

「品物がオロイー」は、品質がよくないことで、「オロイーこつする」は、「わるいことをする」の意になる。いまでは余り聞かれなくなったが、「きようは、きのうよりオロ寒い」といえば、きのうより寒くないことだ。

オロイーの「オロ」は、古語の「疎（おろ）」で、「不完全・不十分であること」や、「たしかでない」「わずかなど」の意をあらわす。

共通語の「うろ覚え」の「うろ」は、「おろ」の転じたものという。オロイーは筑紫方言で、九州では広く使

われている。

カイとなる

「軒さきのカキの木を伐ったら、カイとなった」といえば、うっとうしい物を取りはらったあとの、さわやかな感じをいう。

トンネルをぬけ出たときの感じも同じで、「カイとする」ともいう。語源はわからないが、快感の表現であるので、「快」に関係がありそう。日田独特の方言のようだ。

カザ(クワザ)

高い枝先のカキの実などを採るときに使う。竹ざおの先をふたつに割って、これにカキの枝をはさんでもぎとる。日田の先哲、森春樹が江戸時代に書いた『俚言鈔』に、「梨及柿などを取るくわざ也 余考るに字に果又の字有て物の実を取る物也 これ全ここに云くわざ也」として、「果又」の字を当てている。

この「カザ」を、いまどのくらいの人が知っているか、大分大学の松田正義名誉教授が昭和五四年に調査をして

いる。

日田の老人(平均年齢七〇・五歳)と中学生、それぞれ四〇人を対象にした調査結果は、老人は八〇パーセントの人が知っていたが、中学生ではわずかに三パーセントだったという。

残念だが、カザを使うことがほとんどなくなったので、この方言もやがて忘れられる運命にあるようだ。

カタグル・ニナウ・ナカズル・カク

いまでは肩を使って物を運ぶことは、ほとんどなくなったが、むかしは肩にかつぐことが多かった。

その場合、①材木などをかつぐ ②ロクシヤク(天びん棒)をかつぐ ③二人以上でかつぐ、の三態があり、これを日田ではそれぞれ違った形で表現する。

①材木は「カタグル」②天びん棒は「ニナウ」③二人で「ナカズル」、または「カク」。

こうした使いわけをするのは、西日本の特徴だそうで、福岡県下の方言調査によると、二人でかつぐ場合、豊前から筑前東部はカク、筑前と筑後西部はニナウ、筑後と筑前南半分はナカズル、だそうだ。

三花地区は二人でかつぐ場合、ナカズルとも、カクともいうが、ナカズルは筑後から、カクは豊前から、双方の影響を受けているのが興味ぶかい。

クリがヨム

秋になるとクリのイガがはじけて、つやつやした褐色の実をのぞかせる。クリが熟れることを「クリがヨム」といい、さらになまって、「クリがユージヨル」ともいった。カキがヨムとはいわないので、ヨムは、クリなどの果実が熟れて、裂け目から実がのぞく状態だけをさしている。

ヨムは、「笑^えむ」のなまりで、優雅なことばだが、もうあまり聞かれなくなつた。

ケシネ

もともとは、古語で自家食用の穀物のことをケシネと叫ぶというが、日田の場合は、「米麦をついて精白にすること」、または「飯米」のことをそう呼んだ。

「ケシネに行く」といえば、米麦を精米所に持って行って精米（麦）にしていくこと。また、米びつのことをケ

シネビツと呼んだ。

ケンタイ

ケンタイを共通語でいい表すのはむずかしい。『三谷（小倉）方言集』には「あの男は『ケンタイ』で私の家で飯を食う」とあり、（あたりまえのように いばつて）と解釈があるので、豊前方言と思われる。

日田の場合でも、①遠慮がない ②いばつている ③当り前のようにふるまう、だいたい、そうした態度をさしている。

語源は、「公然」とか「表向き」の意をもつ古語「けんたい」のようだ。

ゴテ

「ゴテが痛い」などというときのゴテは、おもに背中をさす人が多いが、もともとは体ぜんたいの意味があるようだ。

これは「五体」がなまったもので、ゴテゴシラエ（五体ごしらえ）は、山仕事や農作業などの身仕度のこと。また、なにも持たない手ぶらのとき、スゴテ（素五体）な

どという。

コーバシ

幼いころに食べたコーバシ。むせて、あたり一面に粉を吹きちらした思い出をもつ人も多いはずだ。

コーバシは、新しくとれた裸麦を煎^いって粉にひいたもので、筑前・豊前のハツタイコの方が通りがいい。筑後や日田はコーバシで、語源は文語形容詞の「香ばし」を、そのままずばり名前(名詞)にしたものだ。

コブリ

昼食と夕食とのあいだ、または朝食と昼食とのあいだにする簡単な食事がコブリで、「間食・おやつ」の意。農繁期には、あちこちの田畑でコブリの風景がよく見られた。

コブリは、^{こび}なま^びがなまったもの。本来は正午に近い時刻をさすことばだが、転じて古くから間食の意味で使われてきた。

小屋ンツジ

ツジは「屋根裏の物置き」のことで、子どものころ、「小屋ンツジ」や「馬屋ンツジ」で遊んだという人も多い。

三花地区では濁^なってツジというが、もともとは古語「つし」で、辞書には「屋根裏に箕子^{すのこ}でしつらえた物置き」とでている。

豊前方言でも、屋根裏をツシというそうだが、箕子^{すのこ}の天井や天井裏をツシと呼ぶのは、全国各地に多いという。

サマンコ

「窓」のことだが、現在のガラス窓などは、だいたいおもむきが違う。「さま」も古語で、「狭間」の字を当て、狭く小さいすきまのこと。

むかしの城壁の、矢や弾丸を放つための小窓も「さま」と呼んだという。サマンコは、この「さま」からでており、九州各地でも、「窓の格子・明りとり・部屋の下についている窓」などを「さま」と呼んでいたようだ。

寒カツツロー

「寒かったでしょう」の意。もう余り聞かれなくなつたが、高齢の人からたまに耳にすることがある。

「ツロー」は古語「つらむ」で、推量、つまり人の心などをおしはかることばだ。「寒かりつらむ」がなまったもの。風呂の湯かげんがぬるそうなときは、「ヌルカツツロー」となる。

共通語では消え去った古いことばが、方言として、めんめんと続いてきたわけだ。

サンケラ (サンキラ)

「サンケランハ(葉)」ともいう。植物の「さるとりいばら」のこと。

かしわ餅をつくるときは、むかしはみんな近くの野に行つて採り、これで包んだ。語源は、「さるとりいばら」の俗称「山^{さん}歸^{きらい}来」。

大分県南では、サンキレと呼び、これで甘酒まんじゅうを包むという。県内でカカラ・カンカラというところもあるが、呼び名は違って、いずれもまんじゅうを包むのに使っている。

サンゲンアシ

年輩の人ならだれでも知っている「竹馬」のこと。昭和二〇年代ごろまでは、だれも竹馬などとはいわなかった。

脚が長いので、「三^{さん}間^{げん}足」と思っている人もいるが、これは「鷺^{さぎ}足^{あし}」がなまったもの。「さぎあし」とは、うまく名づけたものであり、この優れた呼び名を、先祖はタケウマなどと呼ばずによく残してくれたものと思う。

「さぎあし」は各地でなまって、博多では「サンギョーシ」、県下でも「サイアシ・サンガシ・サンゲンアシ」などと呼ばれている。

シモアゲ

廣瀬淡窓の休道の詩に、「柴罪暁二出ツレバ霜雪ノ如シ」とあるように、日田は晩秋から冬にかけて霜の日がづく。

朝、まっ白に霜が降りた日は、だいたい気持ちよく晴れる日が多いが、たまに、霜の日に天気がくずれて雨になったりすることがある。シモアゲは、こうした気象現象をさしている。

シャベール

「この突っぱりはシャベール」などという。豊前方言の「シャバイ」のなまりで、「かよわい・ひよわい」などの意。

「こんだん牛やシャベール」といえば、「今度買った牛は、か弱くて力がない」ということになる。人の評価にも当て、その人の「力量が足りない」という場合にも使う。

ジヨームン

なんといっても日田方言の代表格で、「美人」のこと。上等の品物をさす「上物」からでている。

「どこそこのジヨームンサン」などというので、「美人」から転じて、「娘さん」の意にも使う。

ジヨームンは、もともと博多周辺の独得の方言で、それが日田まで及んでいることは、博多（福岡）という大都市のもつ文化の力が、日田まで影響していることの証明でもある。

シルシー

「年をとると、晩にでかけて行くのがシルシー」。シル

シーは、本来はじとじと降る雨にぬれる不快感という語であるが、気持ちのうえで、面倒で気のすまぬ心情のときにも使う。

語源は、「汁しる」からでた「シルイ」といわれる。シルイはぬかるみのどろどろした状態をさす語で、「ジリー」（じめじめしている）も、これから出ている。

シルシーことはいろいろあるが、税務署にでかけることも、かなり「シルシー」うちにはいる。

シルル、シレン

「近ごろ目がわるうなつて、ユー（よく）シレンごつなつた」。

シルルは見えるで、シレンは見えないことをいい、いまでも年輩の人からよく聞く。

日田独得の方言と思っていいたら、筑前の篠栗ささぐりや筑後の一部でも使われていたという。「シルル」は、「知る・知れる・知られる」の転義か、あるいは、「目立ってはつきりしていること」を指す、古語の「著しるし」が語源かとも思われる。

セントアプツ

「セントア」ともいう。子守りのとき、子を背負ったうえから着るもので、「ねんねこ」のこと。日田独得の方言のようで、代表的な国語辞典『広辞苑』（岩波書店）にも、「大分県日田地方で守女着物（もりめぎもの）をいう」とでている。

なお、子守りのとき背負う帯を、イツケオビといったが、これは「結ゆいつけ」が、「イツケ」になまったものだ。

ソバオシキ

もうソバオシキ（むささび）も見なくなった。リスより大形で、大木のウロ（空洞）にすみ、肢間に皮膜があるので、それを使って木から木へ鳥のように滑空する。

ソバオシキの名は、「傍折敷そばおしき」からきている。折敷おしきとは、薄板でつくった角盆や隅切盆で、むかしはこれに食物を並べた。多種あって、傍折敷そばおしきは神前に食物を供えるときの縁ふちつきの角盆。

ソバオシキの滑空する姿が、これに似ているので名づけたと思えるが、動物にお盆の名をつけるとは、先祖の

ユーモアがしのばれて面白い。

ツクリンショ

セミの「つくつく法師」。ツクリンショは、わずかな気配で鳴きやむので捕りにくい。

昭和二〇年代ごろまでの子どもセミ取りは、竹ひごをしゃもじ形に曲げて竹ざおにとりつけ、それにクモのネバ（巣）を幾重にもからめつけ、トリモチのようにして捕らえた。

ツクリンショは、その鳴き声からの命名だけに呼び名も多様で、日田市内でも、「ツクリンショ・オーシンチョコチョコ」などと呼ぶところもある。

テীগアテ

人まえて恥ずかしい思いをするのが「テীগアテ」と。方言らしい響きから下品なことばと思っている人もあるが、語源は「耐え難い」だから素性のいいことばだ。「そげなこっしたら、テীগアテ」の場合は、「人に対して面目ない」の意味になる。

小倉の一部でも使ったそうだが、こちらは人を待って

いて、いらいらするときの「耐え難さ」をいうそうだ。

テークツ

「この子はいうこつ聞かんで、テークツマワス」とい
えば、手におえなくても余すこと。テークツの語源は、
「耐え事」かも知れない。

豊前方言でも「テークトマワス」といい、同じ意味で
使う。

テークツするほど、つぎつぎに実のなる豆に「テーク
ツ豆」（さやいんげん）がある。

テボ

竹を編んでつくった「手かご」。手かごといっても、「桑
の葉テボ」などはかなり大型になる。

女の子の好んだ「花テボ」は、小型のテボの横竹に、
何本かの赤く色つけた竹を入れて編んだきれいな「手
かご」。春さきになると、これを車や自転車につんで花
テボ売りが来ていた。

トゼンネー

「話しトギがおらんなき、トゼンネー」は、「話し相手
がないので寂しい」こと。

トゼンネーのトゼンは、吉田兼好の『徒然草』の徒然
で、本来は、「することがなくて暇だ」、つまり退屈の
こと。

それが孤独の寂しさを表すことばとして、今日まで千
年を超えて生きてきたわけで、こうしたことばは、ぜひ
長く残したい。なお、トゼンネーは、トゼンナイのなま
りだが、この「ナイ」は否定ではなくて、形容詞に仕立
てる「ナイ」といわれている。

ナオス

「物を仕舞う、片づけること」で、「机の引出しにナオ
ス」などという。

九州では広く使われるので、方言とは気づかずに使っ
ている人も多い。だが、東京あたりで「ナオス」といえ
ば、「修理する」の意味にとられ、誤解を招くことが多
いという。

ナーンガ アンタ

「どういたしました」に相当することば。

お礼をいわれたときに、相手へ返すことばがこれだった。

面白いのは、豊前が「ナーンガ アンタ」で、筑前は「ナーンノ アンタ」だったという。それからすると、わが三花地区は、「ナーンガ アンタ」で、豊前の影響をうけていることがわかる。

バサレー

「バサレーある」は、「たいそうある」で、バサレーこつする」といえば「無茶なことをする」になる。バサローともいう。

古語の「婆娑羅」は、「派手・乱脈にふるまうこと」や、「ふざけた無法なふるまい」をいうが、これが語源といわれる。

ハシケー

素肌に着た粗い着物などのように、ざらつく感じをいう。脱穀の「モミすり」や、「麦すり」では、ずいぶん

ハシケー目に遭ったものだ。この場合は、首すじなどの肌が刺されるように痛がゆい、むずがゆい不快感をいう。

もともとは、稲や麦の穂のギザギザのある突起部分の「芒」からでた語で、これが肌を刺す不快感の「ハシカイ」になったもの。他人の気に障ることばかりいつていると、「ハシケーひと」といわれる。

近ごろは、ハシケー目に遭うことがなくなったので、若い人にはハシケーがわからない。わからない人が多くなれば、ハシケーは消えてゆく。

バツテン、ケンド(ン)

もつとも代表的な日田方言。バツテンは、「……ばとても」、ケンド(ン)は、「けれども」のなまりとされる。

「行たバツテン」、「行たケンド(ン)」。つまり、双方同じことだ。

両語のうち、バツテンは筑後がわ、ケンド(ン)は豊前がわの方言。三花地区でも両方耳にするが、最近では「バツテン」のほうが多く使われる気がする。

ヒスツイ

町内対抗ソフトボールが、「ヒスツイかかった」とい
えば、「一日じゅうかかった」こと。また、薬の服用が、
「ヒスツイに朝夕二回」とも使う。

ヒスツイは、古語の「日一日」(一日中)のなまりだ。
ヒ音のくり返しが発音しにくいためか、「ヒーテ・ヒー
トイ・ヒシテ・ヒツテイ」など、多くの地方で方言化し
た形で生きつづけている。

ブエン

「無塩」^{ぶえん}、つまり塩を用いてない新鮮な魚介類のこと。

日田は海から遙かに遠いので、むかしは、魚といえは
日もちのするように、塩ものが普通だった。それで塩を
用いない鮮魚の方を、ブエンと呼んで区別したものだ。
昭和初期ごろまでの、つましい食生活がしのばれる懐
かしいことばである。

ベベンチョ

「肩車」のこと。日田にはこの名のついた飴がある。
浮羽方言では、ベベンチョコ・ビビンチョコといい、各

地でビビンという語が九州から中国にかけての広い地域
で、肩車の方言になっている。

ビビンは、子どもが「鬢」^{びん}のあたりに手を掛けること
から出た名とされ、日田のベベンチョも、その同類と思
われる。

マテー

「おろか・のろま・物事にうといこと」などを指して
いう。

語源は古語の「またし(全し)」で、辞典には、①完
全である ②正直である ③おとなしい ④愚直である、
とある。

つまり、もともとは愚かなほどの正直さをいったもの
が、次第におろかさだけを指すことになったようだ。

「孫子守も、マテーコツア ネー」といえば、「容易
ではない」の意味になる。

目にスガル

「目に浮かぶ」ことをいう。「目にスガツチョル」とい
えば、「残像が、強い印象で目に焼きついている」こと

になる。

目にスガルことは人によっていろいろだが、戦時下の妻たちが体験している、出征する夫との日田駅頭での別れの場面など、もっとも目にスガリ、忘れられないことだろう。

スガルは、日田以外にはほとんど使われないうだ。

モーガンコ

氷柱の「つらら」のこと。モーガンコを知っている人も、だんだん少なくなつた。

昭和三〇年代ごろまでは、厳冬期になるとワラぶき屋根の軒さきから、モーガンコがいくつも下がっている風景が見られた。

「モーガ」は、牛馬にひかせて田畑をかきならす「馬鋤」のここと。字形に組んだ横木に長い歯が並んでおり、軒さきの氷柱がこの形に似ているので、「馬鋤の子」（モーガンコ）となつたものだ。

モノカノ

「耳うち」することで、「モノカノをいう」というふう

に使う。耳うちと違つて、モノカノの場合は、ヒソヒソと他人の悪口をいう——といったイメージが強い。

日田独特の方言だが、福岡県の八女あたりでは、これを「モノモノ」という。相互関係はわからないが、同じ語源からでたものらしい。

モモツ

川に入るとき、「モモツまでズボンをまくる」などという。「腿」のことだが、豊前の中津では、「モモツブラ」というそうだ。

タブラは、股や尻などの、ふくらんだ筋肉の部分をいう古語。日田の場合は、モモタブラ→モモタブ→モモタン→モモツと、なまつたものだろう。

第二節 郷土のことわざ

人を笑わせる、気のきいた文句を「しゃれ」というが、むかしの人はしゃれが好きであった。その証拠にたくさんのしゃれた「ことわざ」や、「たとえ」が残っている。そして、そのほとんどが、身近な方言によるものだ。

俚諺りげんといわれるこれらのことばは、ふだんの暮らしのなかでさかんに使われ、それが相手にすぐ通じ、どっと笑いあうといったことが多かった。

俚諺はまた、その発想が奇抜でユーモラスなものが多い。

しかし、これらの俚諺は、時代の変遷のなかで次第に使われなくなってきた。こうした貴重な「ことばの文化財」が忘れられていくことは、残念でならない。

それらをいくらかでも記録する意味もこめて、郷土の俚諺の一部を集めてみた。

あてたふんどしや向こうからはずる

越中ふんどしは、うしろはひもに縫いつけてあるのではずれないが、前に回した部分は、ひもにはさんで垂らしただけなので、向こう（前）からはずれ易い。

「頼みにしたり、当てにしていたことが先方から断られる」などというとき、こういう。

牛の糞で段々重ね

丸いまんじゅう形の馬糞とちがって、牛糞は軟らかで段々重ねになっている。その段々重ねと、交際の面でお礼を何回となくくり返す、お礼の段々重ねをもじってこういう。

内股またこうやくで、あっちついたり、こっちついたり

内股に張った「こうやく」は、はげて反対がわの内股へ張りついたりする。

自分にすっかり考えた考えがなく、あちらへついたり、こちらへついたりする人にかけて言い、「ふた股こうやく」ともいう。

蚕(の) ションベンで桑シイ

蚕は桑の葉を食べるので、桑のシイ(小便の幼児語)をする。この「桑シイ」を「詳しい」にかけて、なんでも物ごとに詳しい人を「蚕ンションベン」という。

木の毒はかざら

「かざら」はつる性の植物で、造林したスギやヒノキに巻きついて害をするので、木にとっては毒になる存在だ。そこで、「木の毒」を「気の毒」にかけて、しゃれたもの。

なにかあって他人から気の毒がられたときなど、「なんの、気の毒アかざら」とぶざけたりする。

ズーシーン(の) カテモン

ズーシーは、「雑炊」で、カテモンは「おかず」。つまり「雑炊のおかず」ということ。

雑炊は野菜などを炊きこんだ粥かゆで、味つけがしてあるので、おかずはあってもよいし、なくても構わない。

必要度の少ないことのととえて、対人関係の中でも、

しっかりしないと「ズーシーンカテモン」になる。

猫(の) 精進で長つづきがせん

「精進しょうじん」は喪中や忌日に肉食せず、菜食すること。肉や魚のすきな猫が、人間なみに精進をしたとしても、とても長つづきするわけがない。

そこで、三日坊主で物ごとに飽き易く、なんでも長つづきしないことにかけて、こういう。

彦山ガラガラ口ばつかり

英彦山みやげの「彦山ガラガラ」は、振るとガラガラ音のする魔除けの土鈴で、家の門口に下げる。

形は少しつぶれた球型で、横長い口があるだけ。このガラガラの口を人の口にかけて、口ばかり達者で、実行の伴わない者を評して「彦山ガラガラ」という。

屋根ふきのテボメ

屋根ふきが屋根の仕上げをするとき、なり(形)を直すことを「ホムル」という。

ワラでふいていたころは、手でホメていたので「手ボメ」といった。のちに麦ワラでふくようになってからは、「ホメ板」を使った。

屋根ふきの仕上げの「手ボメ」を、自分で自分をほめることにかけて、「屋根ふきのテボメ」という。

ホイトン(の) 博打で声ンジョー

ホイト(を食)は他人から金銭や食物をもらって暮らすので、大金を持っているわけがない。そのホイトの間が集まってする博打は、百両かけても威勢のいい声ばかりだ。

大きなことばかりいって、実行ができない者の、掛声ばかりだということにかけていう。

アキヤスのスキヤス

アキヤスは「飽き易い」で、スキヤスは「好き易い」。なんでも新しいことや、珍しいことにはすぐに跳びつくが、長つづきしなくて、熱し易くてさめ易い人をさしていう。

馬盗人(の) テートボシ

どういう理由かわからないが、なみはずれて背の高い男を馬盗人と呼んだ。テートボシ(てとぼし)は手燭で、柄のついた小さな燭台である。

夜道のお供で、足もとを照らすとぼしを、大男が高い所で照らしたのでは暗くて用をなさない。「こうべ(頭)なし」ともいい、図体だけで役に立たず、用をなさないことをさしていう。

遠慮ひもじい、だて寒い

食べものを勧められて、遠慮して食べずにいると、あとでひもじい思いをする。伊達の薄着で寒い目に遭うこともある。

体面だけとりつうって格好つけていると、損をするとのたとえである。

オーコをひン飲だごつしちよる

人に頭を下げることを知らず、反りかえっている人を皮肉っている。オーコ(古語・あぶこ)は、木や竹の棒の

両端を切りそいでつくった「担ぎ棒」。

人がオーコを飲みこめば突っ立った姿勢になり、曲がることができな。棒でなくて、オーコを飲むという発想が奇抜でおいしい。

オガモン(の)干しもん

目立ってやせた人を「オガモン干しもんのごつある」という。オガモ(かまきり)は、見るからにやせた感じだが、それをさらに日干しにしたようだというわけである。

ゲズノ木に登る

「○○にヨメゴ(嫁御)に行くより、ゲズの木に登った方がいい」などといい、「○○」は特定の地区名をさす。ゲズの木は、イゲ(とげ)だらけのカラタチのこと。つまり、過酷な農作業を強いられる○○地区に嫁に行くより、とげだらけのゲズの木に登る方がまだ楽という意味。

幹も枝もぜんぶとげだらけのゲズの木に登るといふ発想が、ふざけていておかしい。ただ、このことわざは、

顔面どおりの意のほかに、むしろそれほど辛い労働を、明るく笑いとばしている響きがある。

ケンケンのツチカキ

「手足がよごれていること」を指してこういった。ケンケンは雉子きじのことで、ツチカキはその足。

きじは羽毛が美しくきれいな鳥だが、足は土をかくのできたないことからきている。むかしの子どもは、「ケンケンのツチカキ」が多かった。

サンケラン(の)葉のしりのごい

サンケランはサルトリイバラで、「しりのごい」は「しりぬぐい」のなまり。むかしは山仕事などで便意を催したとき、木の葉であと始末することが多かった。

そんなときは、カツボン葉(からむし)などが好適だ。サンケラン葉は、手ごろの広さでよさそうだが、じつは表面がつるつるで、ふきとるのには向かない。

良さそうで良くないときのたとえに、こういふ。

茶腹もいつとき、茅壁かやの三年

お茶を飲んでも、空腹の一時しのぎはできる。茅壁は、もう今日の住居からは想像もできないが、刈りとった茅でつくった壁で、これも長くはもたないが当分間にあう。どちらも、「一時しのぎにはなる」とのたとえである。

デーロンのフ笑い

デーロは「やすで」。ムカデに似た体長二センチほどの虫で、物に触れると体を丸めて臭気を放つ。フは「かめむし」で、農作物や果実の汁を吸う害虫。これも触れると悪臭を発する。

ともに臭いもの同士のデーロが、「フが臭い」と笑ったというところで、「自分の欠点には気づかずに、他人の欠点をあざ笑う」ことのたとえである。

鍋なべのなかんのどじょう

どじょう汁にされるとどじょうが、鍋に入れられてしまえば、もう絶体絶命、逃げようがない。

物事が行きづまって、どうにもならなくなった状態を

いう。

ナメクジの正月アルキ

仕事がかどらず、ぬらりくらりしている様をいう。

正月アルキは、嫁などが正月に里帰りすることをいうが、正月なのでゆっくりできる。動作ののろいナメクジと、正月アルキをかさねて、仕事ののろい者を皮肉ったもの。

ネコダンのような恩を着する

ネコダは、ワラを編んでつくった「大形のムシロ」で、これに粗あらなどを干した。ムシロよりずっと広くて、かさばって重い。

その広さや、ずっしりした重さからのたとえて、「ネコダンのような恩を着する」といえば、「押しつけがましい恩を着せる」こと。

昼コーズが鳴く

コーズ(ふくろう)が鳴くのは、寂しい田舎の夜だが、それが昼間も鳴いていれば、いつそう寂しさがつのる。

「昼コーズが鳴く」は、そうしたへんぴな土地のたとえだが、客足が少なく「商売がはやらないさま」にも使う。

ホイトン(の)村びいき

ホイト(乞食)は浮浪しているので、村の争いごとには、まったくかわる立場にはない。

その乞食ですら、「自分の身ぢかな村の方にひいきする」ということで、「わずかなつながりでも、身びいきしたくなる」人情の機微をうがったもの。

みかけボブラ

方言は人をほめるより、けなしことばが精彩に富んでおり、ボブラ(かぼちゃ)もそのひとつで、「なまけ者」のこと。

ボブラと聞けば、だれでも夏の畑のなかにごろんと転がっている様子を思い浮かべる。転がっていることから連想だろうが、ユーモアがあつておもしろい。

「みかけボブラ」は、「外見ばかりよくて、中味のない人」をいう。